

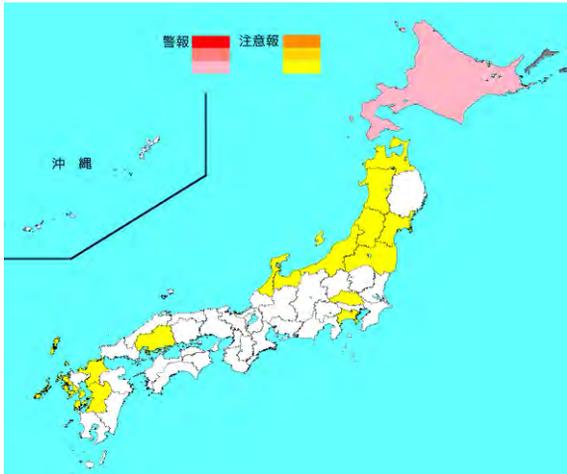
新・こどもと健康

No.35

2019.12.2

インフルエンザはいよいよ流行期入り

11月18日から24日の注意報や警報の発令都道府県マップ



全国の定点当たりの報告数は第47週(11月18日～24日)は3.11でした。都道府県別では、北海道が10.12、青森県8.08、石川県6.04、宮城県5.14、山形県5.13、広島県5.04の順で、警報レベルを超えている(定点当たり30以上)保健所地域は1箇所(1道)、注意報レベルを超えている(定点当たり10以上)保健所地域は29箇所(1道14県)でした。

国内の直近の5週間(10月21日～11月24日)のウイルス検出状況ではAH1pdm2009(いわゆる新型インフルエンザ)が90%、AH3(いわゆるA香港型)が6%、B型が3%でした。堺市は11月11日～17日に定点当たりが1.21、大阪府は11月18日～24日に定点当たりが同じく1.21

となり、流行開始の目安の1を超え、流行期入りしました。

出典：国立感染症研究所 感染症情報センター HP『インフルエンザ流行レベルマップ 2019年第47週(11月18日～11月24日)』、大阪府感染症情報センターHP『大阪府感染症発生動向調査週報(速報)2019年 第47週(11月18日～11月24日)』

日本でも鼻噴霧型のインフルエンザワクチンが承認申請へ

大阪府吹田市にある、阪大微生物研究所がインフルエンザに効く国産の経鼻ワクチンを開発し、近く国に承認申請する方針であると報道されました。これまでの注射ワクチンでは血液中の免疫を強くして重症化を防ぐのが主であったのに対して、経鼻ワクチンではインフルエンザウイルスが入り込もうとするまず入り口の気道の粘膜の免疫機能を高めつつ、血液中の免疫も高めるため、効果が高いはずとされています。おそらく世界初の経鼻不活化ワクチンであり、後述の経鼻生ワクチンと比較して副反応の恐れが少ないと考えられています。不活化ワクチンなので、発症することはありません。数年以内に注射ではないワクチンが普及しているかもしれません。

米国では毒性を弱めたウイルスを鼻に噴射する生ワクチン「フルミスト」が既に販売されています。2003年に米国で認可され、2011年からヨーロッパでも認可されています。2歳以上49歳以下が対象で、9歳未満でインフルエンザワクチンを接種したことがない人やインフルエンザに罹患したことがない人は2回、それ以外の人への接種は1回です。左右の鼻孔から0.1mLずつ噴霧します。注射ではないので痛くない、特に12歳以下でよく効き、接種から有効期間が約1年と長い、注射ワクチンと違いB型にもよく効く(たいていB型の流行するのが遅く、その間も効果が残っているから?)、ワクチンに入っている株と流行が違ってもある程度効果が期待できるという長所、3歳以下で1日程度の発熱が約15%に見られる、1週間以内に風邪様症状が出やすい、接種時に鼻炎があると効きが落ちるなどの短所があるといえます。また、重度の卵アレルギーがある方、5歳未満の喘息のある方や1年以内に喘鳴を認めた方、妊婦や妊娠している可能性のある方などには接種できません。2016/17シーズンにはアメリカ疾病予防管理センター(CDC)は効果が薄いとして、一度推奨を取り下げましたが、2018年2月から再び推奨しています。2019/20シーズンは製造過程でワクチン株の成長がうまくいかず、去年の1/3位しか生産できなかったようです。日本では第一三共株式会社が2016年6月に国に承認申請を出して審査中ですが、まだ未承認であり、個人輸入した医院などで自己責任で接種する形になっています。

出典：日本経済新聞 HP『鼻に噴射でインフル感染予防 国産ワクチン承認申請へ』、至誠会第二病院 HP『噴霧型インフルエンザ生ワクチン「フルミストについて」』、AstraZeneca HP『Flu Mist Quadrivalent (Influenza Vaccine Live, Intranasal) Intranasal Spray 2019-2020 Formula』、横浜市HP『インフルエンザワクチンについて』

